終章　対談

上田早苗×村上龍×陰山英男

上田早苗×村上龍　「子育てと自立」

Ryu Murakami

1952年長崎県生まれ。76年『限りなく透明に近いブルー』で第75回芥川賞受賞。『コインロッカー・ベイビーズ』で野間文芸新人賞受賞。メールマガジン、JMM（ジャパン・メール・メディア）を主宰する。テレビドラマ化もされた最新作『最後の家族』では、引きこもりの息子を持つ家庭を描いている。

上田　最近お書きになられた『最後の家族』はちょっと淋しいお話ですね。みんなでご飯食べながらにこにこして笑っているのがいい家族だと家族自身が思っていた。でもそれは表面を繕（つくろ）っていた幻想だと気が付く。そのときには、既にみんなバラバラになっていて、違うところに行っていたというように。その中で、家族とは何か、家族に依存しない自立とはどういうものなのか、考えさせられました。

村上　うーん。あれはお父さんがちょっと問題あるんですよね。結局自分すべてを会社に依存してるわけだから、それが一番大きな問題で、だから救えないんですよ。あの人が家族を、引きこもりの息子を救うと嘘になっちゃうんですよ。

上田　それはそうですね。会社のために働いてると信じているけれど、本人が気付いてないだけで、それは嘘ですよね。それは、自分のために働いているはず。

村上　昔は会社のために働けば会社が保護してくれるっていう約束事がありましたが。

上田　でも今はそういう時代じゃないですよね。

村上　ええ、もう全然違います。

上田　それをみんな気が付かないっていうのは……。

村上　いや、気が付いているんでしょうけど、恐くて認めたくないんでしょうね。

上田　そうでしょうね。読んだ後でみんなそれぞれ違う道に進んで行ったんだけど、何か時代に取り残されたのがお父さんっていう感じがしました。

村上　ただあれは僕はハッピーエンドだと思って書いています。作者から言えば。

上田　私は読んだ後に子供達がそれぞれ出ていって、お母さんも自分の生き方を見つけて、でもあれほど家族一緒の食事を望んでいたお父さんは故郷へ帰ってコーヒーショップを開店し、後ればせながらの自立。ひとりで生きていくんだなあって、そこが切ないなあと。

それに結婚した後の女性の生き方も日本ではまだまだ夫に依存しているのかもしれないな、と思いました。小説でもありましたよね、お母さんがそう思う場面が。

「昭子は、延江と知り合ってから、どうして若いときに好きな職業を探さなかったのだろうと悔やむようになった。短大を出てすぐに秀吉と結婚し、すぐに子供を作ったのは、自分が何を実現したいのかを考えることから逃げるためじゃなかっただろうか」と。

先日タイに仕事で行ったときに、女性と自立の問題を改めて考えさせられました。タイの女性達は家庭に入るって感覚がないんです。一緒に仕事をしていて家庭のにおいが全然しない。それで、「どうしてかなあ」って思っていたんですけれど、彼女たちは私の人生の五〇％は夫婦、家庭人としてであって、残りの五〇％は自分のためだから、その部分で仕事をしているので、そこには家族は関係ないんだと言うんです。

村上　それは都会で仕事を持っている女性ですよね。

上田　ええ、そうです。一概には言えないかも知れませんが、そういう話を聞いたとき、日本よりも何かすごいなあって思いましたね。タイで仕事をしている女性は、日本より進んでいるのではないかと。

上田　前回ＪＭＭで取材していただいてから、二年くらい経つのでしょうか。あのときか

らずっと疑問に思っていたのですが、村上龍さんは若い頃学校に順応しない、反抗していたと聞きますが、どうして不登校にならなかったのでしょうか。

村上 あの頃不登校ってなかったんですよ。

上田 なかったですね。

村上 逆に家が非常に貧しくて、なかなか学校に出て来られない子がいましたね。小学校の頃は、まだ高度成長の昭和三〇年代、中学生の頃は昭和四〇年代でしたか。学校に行く理由にはいろんなファクターがあると思うんですけど、まず学校に行かないと友達がいないから、学校に行かず何しろって言われてもひとりで裏山で遊ぶわけにもいかないし。夏休みは四〇日くらいあったんですけどもう途中であきちゃって、二週間くらいで学校行きたいなとか、友達に会いたいって思いましたよ。

上田 そうですか。夏休み、今の子供もそう感じているのでしょうか。

村上 まず僕の中学校の時よりも、今の中学生の方がストレスを多く感じていますよ。

上田 そうですね。でもそれは何でだと思いますか。

村上 それはどう生きればいいのか、大人の社会が示していないからじゃないですかね。

上田 確かにね。なんか本当に人の顔色ばかり見てるようなところがあります。

村上 ただ、僕はしょうがないと思いますけどね。どう生きればいいのか教えてもらって

ないわけですから、大人の社会の側から。メディアを通じても、社会はどう生きれば有利なのかってことをまったく伝えていないですよ。学校の先生やお父さんやお母さんも九九％分かっていないでしょう。要するにこれからどう生きれば有利なのか、どうやって自由に選択するのか、それが概念としてないからです。

僕は去年のちょうど今頃、ＮＨＫの教育大特集があって、七時間生番組に出たんですけれど、僕の企画が取り入れられて、「あなたは自分の子供にどういう人生を望みますか？」っていうタイトルになりました。でも、一切そんなこと考えてる人がいないんです。僕は子供にどういう人生を望むのかっていうことを考えていない限り、教育はできないと思うんですが。

上田　そうですね。

村上　父兄の側は「学校が」とか「学校の締め付けが」とか言って、教師の側はほとんど授業にならないと言うわけですね。で、僕がある定時制の高校の先生に「授業にならないんだったら、どういう生徒になってほしいんだ」ってことを聞いたんですよ。そしたら「教師と認めて欲しい」とか訳のわからないこと言い出して。

お母さん方、父兄にもどういう子供になってほしいのかって聞いたんです。そしたら、それは私が決めることじゃありません、子供が決めることですって。それは子供が決める

のは当たり前だけど、自分としてはどう生きてほしいのかって聞いたんですよ。そうしたら答えはない。もちろんそういう社会で育ったら子供達は混乱しますよ。

上田　私もフリースクールという形で子供達と関わってきて五年目になるんですけど、ほんとに何を指針にして生きてるのか見えてこないときがあります。だけど、子供達は自身の生きる指針を見つけなくても、それを誤魔化す時間をつぶすものだけはたくさん氾濫（はんらん）している。

フリースクールに来る子供達だけではなく、いろんな子供達の実状を知りたいと思って、様々な中学生一六〇〇人へアンケートをされている村上龍さんの『「教育の崩壊」という嘘』を読みました。そこで、コミュニケーション前提の整備を、とおっしゃっていますが、村上龍さんのいうコミュニケーションってどういうことを言っているんでしょうか。

村上　もう単純な意味です。思ってることを正確に相手に分かるように伝えるということです。ただ、思ってることがない人の方が多いんで、結局伝えられないんです。結局コミュニケーションスキルがない以前の問題です。非常に多くの父兄と先生が伝えることがないわけですよ。どう生きたらいいかというアイディアが自分の中にないわけだから。

ただ「どう生きるか」とか「人生の指針」というのは、イデオロギーとか思想とか大げさなことじゃないと思うんです。それは非常に単純で、何で食っていくかということです。

前もちょっとこういう話をしましたね。結局、絶対確実なのは大人になったら、みんな嫌でも生活費を稼いでいかないといけない。それを自立って言うんですけど。だったら、嫌なことでこき使われてお金を得るよりも、自分が二日徹夜しても飽きないような充実感がある仕事をしてお金を得た方が楽しいわけです。

そしたら別に年収二〇〇〇万も貰わなくても、実質低いお給料でも、自分が興味が持てることであれば、楽しくやれるからいいんじゃないでしょうか。僕はその一点に尽きると思うんですよ。でもその一点を何で日本人が共有できないかというと、これまではそういう概念がなかったからです。いい会社に入れば全部ＯＫだったから、そういう概念を持てなかったわけです。ほとんどの大人がそういった考え方をしてないから、みんないい会社に入ろうとする。

だから「あなたは何になるの」って子供に聞くのは日本社会では幼稚園までなんですよ。小学校、中学校から「どこの大学に行くの」になって、大学になったら「どこの会社に入るの」になるんです。小学校であろうが、中学、高校であろうが、何になるのか、何で食っていくのかってことが本当は最優先、前提になるはずです。これは絶対正しいわけじゃなく、僕の考えですけど、そこが押さえられないときにどんな話合いをしても無駄ですよ。

上田　それはよくわかります。私は子供達と話していて、「何でこんな話が合わないんだろ

う」「何でこんなに話が通じないんだろう」って思うことがあります。まるで外国人と話しているみたいに噛み合わない。でもじゃあ噛み合わない、わからないっからって妥協して飲み込んじゃって、それを意思表示しないと話が前に行かない。それじゃ、「わからないってことから話そう」ってことでスタートしたんです。日常接している学生と私とでも、コミュニケーションがとれないときがあるのは、きっと根本にお互いの共通言語が存在していないからでしょう。認識もそうですけど。そこが違うから、子供達と話が食い違うんだろうと。

例えば私はいろんな理想を掲げてきているけれど、子供は理想を理解する以前のところ、もっと原始的なところで、何かつっかえているように感じます。そこでコミュニケーションってことをもう一回考えようと提案したんです。というのも、何かを伝えようとしたときに、最低限必要なコミュニケーションの手段がなければ会話に発展しない、という思いがあって。生きる力を伝える前に、まずコミュニケーションの前提を考えないといけない。そう思って子供たちと話してみると、基礎学力が驚くほどないんですよ。極端なところ「九日」を「きゅうにち」とは知っていても「ここのか」という言葉は知らない。

このへんについて、いろんな若い方と取材で会われていると思いますが、コミュニケーションのギャップについて何か感じられたことはありますか。

村上　でもそれはしょうがない問題だと思いますけどね。僕が小さい頃はまだ親の家におばあちゃんもいっしょに住んでいて、大家族制の名残みたいなものがあったんですけど、学校と家以外にも、大家族制の名残だとか、あるいは子供達だけのグループがありまして、そこで違う学年の子ともいっしょに遊んでいましたから、そこで学ぶこともありました。だから何だかんだ言いながら学ぶ場所も機会も多かったと思いますよ。

今はそうした場所が少ないんでコミュニケーション能力だとか、常識とか、それから一種のモラルといいますか、二年年上の人にこんなことといったら殴られるだとか、そういうこと学ぶ機会ってのがなかなかないんです。だからそれは上田学園に来てる子が特別そうなんじゃなくて、逆に上田学園に来るような子はシャープだと思うんですよ。感覚が鈍感じゃないですよ。だから結局今の学校システムに合わないわけだし、これじゃないと思ってるから不登校するわけです。

逆に学校には行かなくちゃいけない、行くもんだ、親には従うもんだとかいって何となく学校に行って、何となく親の言うとおり人生歩む人が一番恐い。そこがまだ一番多いんですけど。まだきっとマジョリティだと思うんですが。その集団が一番恐いです。彼らがいつか親や社会に騙されたと気付いたときに。無自覚に反抗している人がとりあえずはフリーターに吸い込まれたり、引きこもりとかに吸い込まれるわけで、だから何かそういう

症状が出ている人の方がまだ対処しやすいんじゃないかと思うんですね。

上田　それはありますね。私など生徒たちと直接関わっているから、いろいろ分かってくるのだと思います。今の教育で何かやらなきゃならないと思っていても、多分現場で子供達と接していないと何をやっていいのかすら分からないと思うんです。村上さんは本の中で、現場に立つ人だけじゃない周りの一般の人も教育に向かって参画していく必要もあると、おっしゃっていますけれど、そういう時に何からやっていいか分からない方ってたくさんいると思うんですよね。昔は隣のおじさんやおばさんが余計なお世話のように、「何をやってはいけない」「それはやっちゃいけない」と言ってくれることでたくさん学べたことがありました。しかし今はそういうのがありません。情報が入っているようだけど、情報を正確に理解する言葉っていうか知識がちゃんと育っていない。入ってくる情報を中途半端に吸収して、消化不良のようになっているところがあります。そういう中で子供達を育てていかなきゃならないときに、何がこれから必要だとお考えでしょうか。

村上　残念ながら、すべての子供にフィットする処方箋はないと思いますね。だから、上田先生がおやりになっているようなフリースクール、あるいは個別な非常にプライベートな学校であるとか、そういうところに行けない人たちに公立の普通の学校でカウンセラーを増やすとか、学級の人数を減らすなどを同時にすすめていかないといけないと思います。

日本の子供という一つのマスを対象にした処方箋はない、と思います。それがあるとしたら全部嘘で、そういうことを言ってる人は「みんなが奉仕活動を」なんて言い出す。非常に危険なことなんじゃないかと思います。

日本の子供全体を対象にして考えるのは最初から間違っていますよね。というよりいつも言ってることですけど、まず大人の社会が気付いたり、考え方を変えていったりしないと、子供の心配してる場合じゃないんで。例えば三万人になってしまったという中高年の自殺をどう減らすかという問題と全部パラレルであり、同じ問題ですからね。大人の社会の中に当然変化すべきなのに変化に対応できていない人がいっぱいいる場合には、子供をどうこうするって問題ではないのではないでしょうか。

上田　自分の足元から、ということでしょうか。

村上　大人の社会がいい方向に変化していけば、それを当然子供は見ています。彼らは案外、逞しいですし。大人が混乱してどうしていいか分からないから、子供が混乱しているっていう状況だと思うんです。

上田　確かに今本当に夢を持って生きている大人っていないですものね。

村上　もちろん、いないことはないですけど。では昔はいたかっていうと、そうでもないですから。

ただ昔は会社に守られて生きるだとか、日本人一丸となってお金持ちになるとかね、社会的インフラを整えるとか大目標があったので、たとえばむかしはダムとかを作る人たちは英雄として映画になったりしています。『黒部（くろべ）の太陽』とか。それが今ダムを作る人は無駄遣いと言われてしまう。昔が夢があったんじゃなくて、今は誰にもリスペクトされなくなっちゃったんですよ。

上田　どうしてリスペクトされなくなったんでしょうか。

村上　昔はダムを作ることにそれなりの意味があったし、まあ道路作ったり橋を作ったりするのが、要するに国家建設というか社会インフラの整備としての意味合いがありました。それが次第に景気対策のようになってしまって、やってることは同じだけど意味合いが違ってきちゃった。昭和三〇年代にダム作っているとかっこいいっていう共通認識はありましたが、今はもう自然と、お父さんダム作ってるって学校で言えない雰囲気が出てきた。環境問題になるし、特に長野県では言えない。そういう感じになってきています。だから、今の人が夢を失っているわけじゃなくて、昔はみんな金持ちになろうっていうモチベーションがあっただけだと思います。

上田　でもその共通のモチベーションはなくなりましたよね。

村上　ええ、そうです。

上田　そのときに子供達を導いていくために大人達がやらなければならないことは、まず自分の生活を、ということでしょうか。

村上　まず、自分のことを考えることでしょう。これは一般的な話ですけれど、自分のことを考えなさいということですよね。だから引きこもりを題材にした『最後の家族』のなかでも、カウンセラーだとか親の会に通うとかしたりして、お母さんが自分が楽になって行くわけですよね。そうやってお母さんが楽になっていくと、子供も楽になっていくんですよ。だから結局子供をどうしようかじゃなくて、まず自分が活き活きとして生きることが、生きるモチベーションを持つことが大事なんじゃないかなと思うわけです。もちろん非常にケアする側面は必要だし、ほったらかしとかそういうのとは意味合いが全然違うんですけどね。

上田　お互いに依存して生きるんじゃなくて、自立すること、そのことが結果的に親しい人を救うのだというメッセージはすごく重要ですね。カウンセラーの方の話を聞くと親が自分の生き方を持つ、自分のモチベーションをきちんと持つ、それを見て子供たちがお母さん、ちゃんと自分をやっている、生きているってことで俺もやらなきゃと思ってくれるのは事実だと思います。だけれど父親が子供の教育に携わらないだとか、家庭を顧みないからということも原因のひとつのようによく言われますがそれはどう思われますか。

村上　それもケースバイケースじゃないでしょうか。一概に毎週一回河原でバーベキューすればいいってもんじゃないですから。父親の生き方を子供は見ているから、それは残酷に伝わるんですよ。お父さんだから何をすればいいとか、これがこうだからこうというのはないと思いますよ。逆に言うとどういうふうに育ててもいいと思うんですが、その人の生き方を子供は見てるってことですよね。もちろん赤ちゃんの時に放っておいたりするのは駄目ですよ。3歳児を車においてパチンコ行っちゃったりだとか、それは論外でこれはそういうことじゃないですけど。

上田　村上さんが少年時代、反抗なさった時にお父さんお母さんはどんなふうにおっしゃっていましたか。

村上　まあ、本格的な反抗がはじまったのは中学生の時ですけど、怒られました。親父からも怒られたし。ただ高校のときバリケード封鎖みたいのをやって無期謹慎になったときに、その頃は高三だからもうほとんど親父と口利かないという感じだったんだけれど、うちのじいさんが反抗してくれて、俺も海軍の時は四回くらい上官を突き落として、営巣（えいそう）に入ったと言っていました。実はおまえの親父もＰＴＡ会長殴っただとか、大問題になったことがあるんだ。だからこれはもう家系だから、偉そうな奴に歯向かったり、反抗するのは家系だから仕方ない。そんなふうにおじいちゃんが言ってくれて、「なんだ」と思って少

し楽になりましたね。まあ謹慎になったのは怒られましたけど、集団とうまくやっていくのが苦手だというのは知っていたんで、小学校のときから諦めていましたけど。もうサラリーマンにはなれないってのは決めていました。最初からサラリーマンという選択肢を捨ててていたんで、結果的には良かったんだと思います。だけどそんなの昔だったら一〇万人にひとりぐらいかもしれません。

上田　でも、ご自分がそういう時期を通り越して来られて、ある時期から教育に題材をとったものを書かれるきっかけはどうしてでしょうか。やはりどこかおかしいと思ったからでしょうか。

村上　おかしいといいますか、大きく言うと今、構造改革と言われてますけど、日本が駄目になったわけじゃなく、もう終わってしまった高度成長と同じやり方をしてるから、外の世界は大変化しているのに、その変化に対応できなくなっていたり、既に非効率なシステムになっていたりします。そこで子供が混乱して、いろんな症状を出すわけですよね。学校に行かなくなったり、あるいはストレスで拒食症になったりね。それは当たり前なことなのに、みんな大騒ぎするわけですよ。どうしちゃったの、と。

今、求められているのはどういう子供なんでしょうか。親の言うこと聞いて、先生の言うこと聞いて、それで悪いことせずにコツコツ学ぶのがいい生徒でしょうか。そういう人

はみんなオウムに行ったんですよ、どうしようもなくて。まじめな子ですよ。今こういう変化の時代にうまく適応して活躍している個人はみんな社会や学校とうまく折り合わなかったんです。だから、そういった意味で大きく捉えると、子供達は今反抗してるわけですよ。反逆してるわけですよ。そこに日本が抱える問題がこう反映されているわけだから、それは作家としては書かなきゃいけない。語弊(ごへい)があるけどおもしろいですからね。

上田　今までなかったですものね。

村上　それは現代特有の社会的な問題なので、作家が描くのは当たり前だと思いますよ。むしろ僕には新撰組だとか書く方がわからないですけどね。それはそれでエンターテインメントだからいいですけど。

上田　私も、もしかしたら親が悪いんじゃないか、学校の先生が悪いんじゃないか、学校のシステムが悪いんじゃないかといろいろ考えてみたんですが、言われてみると確かに昔も問題のある先生も親もいっぱいいました。今は親が自分の生き様ってのをまず見せていないのでしょうか。

村上　いや、見せてるんです。見せてるんですけど、とにかく何の助けにもならない、ということでしょう。

上田　どちらかというと、おろおろしているんじゃないでしょうか。テレビなどでも芸能

人が自分の子供を公園デビューさせるなどといって特集していますが、あれはおかしいと思います。そこからもういじめの問題が始まっていると思うのに。どうしておかしいかと言うと、単に子供が遊びに行くところのはずの公園に、デビューするためにお母さんがきれいなかっこうをしていかないといけない。さらに勢力のあるお母さんの顔色を窺って話を合わせ、子供がいたずらすると「ママのためにいい子にしていてね」とお願いする。こうやって母親が子供に、人の顔色を見て生きることを無意識に教えてしまっている。

本を読ませていただいて、村上さんの思考回路って外国人みたいだなあっていうのを時々感じていたんです。日本的習慣では、「何をするのも誰かのため」という言い方をしますけれど、そこがおかしい。あらゆることは自分のためにするのじゃないのか、と思うんです。そういう言い方では、外国人がたくさん入ってくる中で変わっていかないと理解されにくいと思うんです。

まして子供達には昔と違って外来語が自国語みたいに入ってきていて、逆に自国語が外国語のように通じなくなったりしている不思議な現象があります。同じ単語でも世代間でコミュニケーションが取れないほど違う意味合いに理解していたりします。それが原因で、コミュニケーションが取れていないってことがあったり。そういう親と子供の表現の仕方がずれてきているっていうのをすごく感じていて、おかしいなおかしいなって。それをマ

スコミが気が付かないで、取りあげないのもおかしいんじゃないでしょうか。

村上　それはマスコミは気付かないですよ。マスコミには期待しちゃだめですよ。一番遅れていますから。

上田　そうなんでしょうか。本当は一番敏感なはずなのに。

村上　マスコミでも良心的なところはありますけど、マスコミと教育っていうのは「日本語の壁」に守られてるから、一番変化に対して鈍いんです。だからそれはしょうがないです。あと、公園デビューするお母さんも他にどうしていいか分からないわけだから、公園デビューに関して自由なお母さんだっているわけだから、それはしょうがないですね。というよりマスコミはもう駄目ですよ。だから出来るのはああいうワイドショーとかを見ない人間をいかに増やすかぐらいですよね。

上田　ということは自分の判断基準をきちんと持てるようにしておかないといけないってことですよね。

村上　そうなんですが、それは持てないですよ。何かがないと。お母さんが自分の判断基準を持てるような自分との対象があればいいんですけどね。

上田　親をそういうふうにもっていくためにはどういうふうにしたらいいでしょうか。

村上　それは僕にはわかりません。いろんな人がいますから。まったくそういうことを考

えることのできない人が七割くらいいて、もう既に変化に適応して生きている人が五％くらいいて、残り二五％は何かおかしいんだけど、何をしていいのかわからない。この人たちをこの五％に近づけることはできますけど、全体の親をレベルアップするのは無理ですよ。だからそういうことが可能だっていう幻想があるのは良くない。この七割の人に少しでも考える方がいいってことに気付かせる、そういった戦略しかないわけですよ。一〇〇％に有効なソリューションってないですよ。

上田　現実問題、子供達がどうやっていいかわからないっていうのは、親が役に立つ生き様というか、こういうふうにすると自分の人生に得になるよ、というアナウンスをしていないからですよね。うちに帰っても勉強しない、勉強時間はゼロに等しい子がかなりいるといいますね。その中で歌手になりたいと言う子がいて、歌手になりたいから帰ってきても音楽ばかりきいている。親は高校に行って欲しいとは思ってるけど、今さらやっても追いつかないと嘆いている。

親は「勉強させたいと言っても聞かないし、小さい頃から歌手になりたいと言っているので応援したいと思います。そうしないと親子の関係が断絶しますから」と言っている。じゃあその子は歌手になるために歌を習いに行ったり、踊りを習いに行ったりして、可能性を切り開くために何か努力をしているかといったらしていない。何もしていないから、

子供はハアハア歌って時間だけが過ぎて行く。それはすごいもったいない。親がそういうことを言えない。子供に遠慮して言えないのでしょうか。

村上　いや、親はそれは遠慮してるんじゃなくて分からなくて言えないんだと思いますよ。歌手になりたいと言う子供に対して、対応できていない。社会の側も簡単に歌手になれるような共通認識がある。別に必ずしも今活躍してる歌手のすべてが歌の練習してきたわけでもないですし。

ただその場合、親の側にどういう対応ができるかってことなんですが、そのときに親がスキルを得たり、トレーニングが必要だったり、そういうことをしておくと社会的に有利に生きられることを態度で示しておけば、子供は逆に簡単に歌手になりたいとは言わないはずなんですよね。ただそれはほんと五%の母親にしかそういうことはできないんで、歌手になりたいって子が大勢いるってのはしょうがないですよね。

上田　それじゃあ、五%じゃない人たちを五%に近づけるには何をするべきなんでしょうか。

村上　それは社会的なアナウンスをしていくしかないですよね。

上田　それはやっぱりいろんな立場の方が自分の立場の意見をアナウンスしていくということでしょうか。

村上　少なくとも僕は他の人のことはよく分からないんですけど、自分は機会をみつけたり、人に聞かれればそういうことを言うってだけで。だからもっとみんな自分勝手になればいいと思うんですよね。自分のことを考えれば。だれも自分のことを考えてないんですよ。なんか自分のことを考えたくないから社会のことを考えるって言ってるだけで、自分のことを考えるのが恐い。それだったら、僕はどうやったら自分がハッピーに生きられるのかとか、考えますけどね。ただ上田先生は立場上そうは言っておられない訳だから。

上田　でも、私も自分では基本的にはとっても幸せだと思ってます。自分で好きなことをやっているから。苦労はすごくありますけれど。子供達に言ってるんですけれど、お金のことを考えれば大変、でもお金に替えられない自己満足はあるって。それはなぜかっていうと、あなた達がいい方に変わっていく。それが私がやってることが間違っていないなという自信になる。やっぱり私はこの仕事が好きだから、そういった仕事を選択できたことが幸せだなって思う。苦労でもういやんなっちゃうと思いながら、こうやってやってこれたのも、そこだから、そこだけはね、あなた達に言っておきたいと言う。

村上　大丈夫、それは言わなくても必ず伝わっていますよ。

上田　そうでしょうか。実は小説家になりたいっていう男の子がいまして、村上さんに聞いてみたいと言っていたんです。「芥川賞って一億貰えるんですか」って。もし俺が一億円

貰ったら先生にあげるよ、と言っていました。

村上　そんな貰えないですよ。一〇〇万じゃないですか、賞金は。

上田　それを聞いていた他の子が「先生それは生徒集める方が早いよ。こいつ漢字書けないんだから」って。

村上　でも、あの子達は感覚がシャープだなあ、と思いましたね。キューバの音楽も自分で行きたいって言ってたでしょ。ああいうキューバの音楽とかを聞いて、わあすごいなあ、ああ気持ちいいなあって思えるのは、大事なところが侵されてないんですよ。

上田　私もそういう意味では、いろんな問題を抱えているんですけれど、ある面で選ばれてきた子供達だと思っています。何か目的をもって上田学園に自分で来ようと思った時点でひとつハードルは越えてると思っていますから。

村上　自分で選んでますからね。

上田　そうですね。今回上田学園の旅行でヨーロッパのジュネーブにいるとき同時テロがあったんですけれど、ジュネーブに入る前にチューリッヒでスイス人の方に家の中を見せていただく機会がありました。そのときに自分達のことは自分達で守らなければいけないと言って、地下室のシェルターを見せて貰える機会があったんです。その後、あのテロがありまして、それで子供達がものすごいナーバスになったんですね。私もナーバスになり

ましたけれど。でも世の中って、私達が知らないところで、テロとはまた違った形でいっぱい事件や出来事が起きている。今はマスコミやインターネットが発達して、同時に見られちゃうからすごいショックだけれど、そういうことはたくさんあるんだよって話をしていたんですね。

それでそのときに、三週間の旅行だったんですが、子供達と徹底的に話し合わなければならないことがあって、何回も何回も上田学園の存続をかけても、という感じで話し合ったことがあるんです。私が子供達の壁になるという感じで。

それは自分の身は自分で守らなければいけないのに、お金はどうだっていいや、食べられるからいいや、という感覚なので、あなた親がいなくなったらどうする、親はいつまで生きていてくれないのよ、その前にちゃんと自分で生きていけるようにきちんとスキルなり身につけていかなければいけないのに、ってことをものすごい話し合ったんです。そのなかで異論もありましたけど、段々納得してくれて、もともとがいいものを持っているから輝き出すんですね。教師をやってて良かったなあって思う瞬間です。一端輝き始めれば、たとえどんな遠回りをしても、きっとこの子達は自分の納得行く人生を歩むだろうと思っています。

そういう意味でいわゆる規格型の子供達と違って、こういうところに来る子は簡単に測

りきれないすごいものをたくさん持っているので、それだけは大事にしてあげたいし、伸ばしてあげたいって思うんです。ただ私が心配なのは、うちの子達だけかもしれませんが、物事を判断したり解釈する最低限の基礎学力が足りないことなんです。

村上　それは先生のせいじゃないですよ。無理ですよ。それはオオカミに育てられたら、オオカミ少年になっちゃうわけだから。子供達が自然発生的に自分達で身につけるわけはないですからね。

上田　もう基礎を早くにやってあげなきゃって。でもたまにすごく笑っちゃうんですけどね、辞書を引けない子がいますからね。うちに遊びに来た大学生でも引き方を知らない子がいました。

村上　ただ子供っていうのは、基本的にみんな危機感を持って生きていますから、何かを学ばなきゃ生きていけないってことは本能的に知っています。だからそれが必要だということさえ教えてあげれば、ということなんでしょう。

上田　結局、本来子供にとって必要な失敗のチャンスをみんなでつぶしているんですね。放っておけば、自分で頭をぶつけて必要だって分かってくるときに、その頭をぶつける前に、お母さんが相変わらず守ってしまう。

村上　それはお母さんにしてもそういう過保護や過干渉の人もいるかもしれないし、まっ

たく関与しない人もいると思うし、だからお母さんの責任だけじゃないと思うんです。お母さんだけでは、今の日本でお母さんだけが進んで変化に適応できるようになるわけじゃないので。

ただ、全部変える、日本を変えようとしたら難しいわけだけど、そうじゃなくていいんですよ。ひとりが変わるだけでいいんですよ。誰も変わらなくても自分だけ変わればいいんだから。

上田　それは本当にそうですね。一番笑ってしまうのは、強制的に勉強させるのは駄目、学歴不要と言っておきながら、自分の子供だけは塾なりいい学校に行かせるというような茶番劇ですね。

有言実行してくれれば、自分だけでも変えられればそれは大きいと思うんですけど、日本の場合、隣近所を見ながら行動しようとしている。個人ではなかなかできない。

村上　結局もう全体のことは放っておけばいいんじゃないでしょうか。とても僕は日本を変えることなんてできないし。少なくとも妹とか友達の家族なんかで、あるいは自分が小説を書くことで伝えていく。

日本とか親とかそういう括りを一切やめるっていう方向でやらないと、結局堂々めぐりになっちゃう気がするんですよ。

上田　ええ。私は自分の中に昔の薬箱みたいに、いろいろな引出しをもって、何か問題や必要に応じてその引出しを開けて、参考にできるような情報が欲しいと思っています。たった四人の学校でも四人ともまったく違うわけですし、四人が同じ方向を向くわけではない。じゃあそのなかで、私がこれはと思うものを、いろいろな方から学んでストックしておいた薬箱から選び、まず投げかけてみる。それを受けるか受けないかは子供達次第。私は情報を発信しているから、そこからもらったときに必要なものと捨てるものを判断する力を持って欲しいと思っています。

そうやって考えていたら、村上龍さんだったらどんな学校作るのかなって思ったんです。

村上　僕は学校作らないですね。

上田　たぶんそうおっしゃるだろう、作らないとお答えになるだろうとは思っていたんですけれど、作らないのはどうしてですか？

村上　小説を書くだけで手一杯なのと、そういった、ない仮定をしても仕方がないですから。例えば文部科学大臣になったら何をやるかとか聞かれるんですけど、やるつもりないですからね。そういうことを考えてるひまがあったら次の作品を考えた方がいいです。

上田　本当にご自分がやりたいことがわかってらっしゃるんですね。できることとできないことと。

村上　まあそうですね。

上田　どうしてそうなったんでしょうか。

村上　日本的集団に馴染（なじ）まなかったからですかね。

上田　それははじめからですか。生まれてからそういう環境で育っていたってことなんですか。

村上　うちの父も美術教師で画家だった、というのもあって、別に人と同じじゃなくてもいいって言って育てられましたから。個性的であっていいんだよということはよく言われて育ったんで。だからさっきおっしゃったような過干渉の親のタイプとは違いましたね。うちの母も教師でしたが、うちの母は忙しくて、過干渉するひまないんですよ。なんか相談しても忙しい、うるさいから向こう行ってろというように、もうどうしても自分で考えるしかないんですが、あれはすごく良かったと思いますね。今になってうちの母は、「あの頃悪かったわね」って言うんですけど。別に全然悪くはなかったですね。だから極端な話、日本のお母さんはみんな働けばいいんじゃないですかね。

上田　家でこれだけは守りなさい、っていう決めごとのようなものは何かありましたか。これはやっちゃいけないとか。

村上　弱い者いじめと人に迷惑かけちゃいけないってのはありましたけど、それは簡単な

決まりです。弱い者をいじめるのはフェアではないことと、バスの中で騒いだりすると多大なコストを払わなければいけなくなる、そういうことは社会性ですよね。

上田　確かにうちも生徒をお預かりするときに聞くんですけれど、お宅は最低限これだけは、というのがありますかと。

村上　ただ僕は子供に何にも言ってないんですよ。生まれてから一回も勉強しろって言ったことがないんです。ホテルのロビーとか走りまわっちゃだめだよ、とかは言いましたけど、そんなのは教育というより、もう常識みたいなことなんで。

上田　お子さんは今、大学生ですが、こういう方向に進みたいっていう相談にのったりされましたか。

村上　勝手に決めていきましたね。

上田　お父さんやお家の方針というのは。

村上　いや、うちは家内も何にも言わないですから。よくわかんないですけど。社会的には自分の興味の持てる道を選んだ方がいいとか言ってますけど、自分の子供には言ったことないんですよ。

上田　お子さんもそうやってご自分で進む方向を決めていますが、村上さんはどこを自立の基準として置いていらっしゃいますか。

村上　精神的な自立という意味では小学校くらいからはじまっていますか。まあ、今も相当自立してると思いますよ。自分で何かを選び取っているという意味で。

上田　そういう最低限の規律、これだけはだめというのがあって、その他は放っておかれるなかで自然にそうなったということですか。

村上　ええ、叱ったことはないです。多分彼の人生でも三回くらいしかないだろうな。ひとつはホテルのロビーで走ったこととかそういうことですが、伝わればやめますから。

上田　その伝わるってのはどうやったら一番伝わるのでしょうか。

村上　自分がやらないってことでしょうね。

上田　その伝え方は昔言った「親が背中で育てる」というような意味ですか。

村上　それとは違うと思います。後ろ姿見ててもわからないこと多いですよ。いやずっと見てるんですよ、子供って。親しか参考にするしかない時期がけっこう長く続くから。だから恐いぐらい親を見てますよ。そういう意味で、親だからどうしたらいいかっていう絶対はないですよね。

上田　大人として子供が自分達をきっちり見ていることを意識しなさいよ、ということですか。

村上　ただそれも自分はしなかったですから。わからないんですけど、何か背中を見て育

つというのはちょっと違うと思うんです。それはなんで違うかというと、背中を見て育つってのはコミュニケーションがなくても大丈夫ってニュアンスがあるじゃないですか。そんなことはなくて、コミュニケーションは必要ですよ。

上田 お子さんと話をなさる機会は多かったですか。

村上 話はよくしました。

上田 だから村上龍さんのいうコミュニケーションによるコントロールっていうのは、ほんとにコミュニケーションって意味なんですね。そうすると本でおっしゃっているコミュニケーションの整備をするというのはどういう意味なんでしょうか。

村上 それは間違っていたら素直に謝るとか、そういうことですよね。

上田 本当に人間としての基礎ということですね。また、いま個性教育、ゆとり教育などいろいろ掲げられていますけれど、ああいう言葉に対してはどう思いますか。

村上 いや、悪くはないと思います。結局、どれも昔の規格人間ではいけないんだ、という反省が込められているんで、それは完璧じゃないですけど。

上田 確かに教育はどういうふうに変わっていくべきか、というのは現実に動いてみないとわからないところがあります。やってみてはじめてその時の子供によって違う結果が出てくるでしょうから、またそこから変えていかないと仕方ないと思います。

村上　さっき言ったように何かで食っていかなきゃならないんだってことは事実なんで、子供にはわかると思うんです。だったら嫌なことして人にこき使われるよりも、自分でやりたいことやった方がいいと思わないかって。そう言えばみんな頷くんじゃないですか。

上田　そうですね。やっぱり食べていく方法を身につけなきゃならないし、それが一番根本だと思います。だけど現代の子供にその話をすると、だって十分食べれるし、飢餓なんか経験したことない人間にそういったことを言っても仕方ないよって言うんですね。だから私はそういうことを分からせるというか、体験させるチャンスを与えるようにしています。そうしないとなかなか納得しないですから。

村上　それは社会的な背景が大きいのかもしれません。僕は小学生の頃、サラリーマンという選択肢をなくしたんで、そうすると何かで食っていかなきゃならないってことをずっと考えていましたから。

上田　そこがすごいですね。

村上　サラリーマンで食っていかないんだったら、ちっちゃいころは医者とか弁護士になろうと思っていたし。それに食うに困らないからといっても、子供たちが食っていけるっていうのは親の金ですからね。親の金だってことは自由がないってことですよ。親の言うとおりにしなきゃいけないってことです。

上田　親がスポンサーですからね。でも子供達は親がどうにでもなる、自由になると思ってるんです。

村上　僕はとにかく親の元から離れたかったんで、自分で稼がなきゃならなかったわけです。例えば好きな海外とか行けないでしょ。

上田　そうですね。

村上　好きなCD一枚買えないですよ。自由じゃないですよね。僕は芥川賞取って本が売れて、そのとき一〇〇〇万くらい入ってきたんですけど、そのときに自由だって思いました。一〇〇万おろして秋葉原にステレオ買いに行って、あの気持ちいい感じは最高だったですよ。

上田　でも、たぶんそれが村上龍さんの原動力にあるんでしょうね。当たり前のことっておっしゃったけど、当たり前のことが今ないというか。

村上　当時も当たり前ではなかったですけどね、自分はメインストリームじゃなかったし。ただ、教育関係者やメディアとか、縁もゆかりもないような銀行とか証券会社とか大きな会社が僕の話を聞きたがるということは、本当は今の時代は僕がもう当たり前じゃなきゃいけないってことだと思います。

上田　本当はそうなんでしょうね。それと、みんなが憧れているんじゃないですか。

村上　たぶん僕に変化に適応するコツを聞きたいんじゃないんでしょうか。

上田　わかります。だってみんな変わらなきゃいけないっていうのは意識として分かっているけれど、それを実際どうしたらいいのかわからないっていうのがありますからね。

どうしたらいいかわからない問題と言えば、今の小学生は四五分間ずっと座っていることができないということですね。幼稚園は幼稚園で自由奔放に育てなきゃいけないと言って、小さいときから座学をやらせない。小さいときから団体生活のなかでも静かにしていなきゃならない時間があるとか、そういうことを教えるのがいけないという風潮がありませんか。

村上　それは慣れてないからでしょう。座らなきゃいけないということは、座らないといけないじゃなくて、座らないとコストを払わなきゃいけないということです。そういったきちんと座る訓練をしていない子はコストを払わなければいけないっていうコンセンサスができていればいいのではないでしょうか。

上田　それが座る訓練をせずにずっときてしまうと、授業が成立しなくなってしまう。

村上　この点に関しては、藤原先生やそこのところだけは河上先生のおられるプロ教師の会と唯一同じなんですけれど、小学校のクラスで今から授業をしますと言って、席に着かない子は家に帰ってもらうということをしたらいい。もう一回幼稚園からやり直してもら

う。それしかないんじゃないかと思います。

上田　本当にそうですよね。

村上　そうしないと、もう小学校ってのは、授業のときは席に着くんですよ、ってことを教える場ではないですから。

上田　それぞれ幼稚園、小学校の時はというようにそれぞれ役割があると思うんですよ。その役割、境界線が今なくなっちゃってるんじゃないかな、と思います。

村上　席に着くのを教えるのは幼稚園ですね。だから小学校で席に着かなければコストを払うことになるんですよ。これは下手をすれば、死刑になってしまう問題ですからね。

ルールを守らなければ死刑になったり、逮捕されたりする。だからルールを守るってことがマストになって、ルールを守らなければコストを払うことになるんだよ、ということが理解できるようにするってことです。ただそれは簡単なことで、個別にやるんです。ばらばらに席につかないクラスの子供を全員席に着かせようとするから難しいのであって、それぞれ家に帰ってもらって、それから個人個人に教えてできてから学校に来てもらえばいいんですよ。

上田　本当にそういうシステムを作るといいですね。

村上　例えば、ホテルのロビーを走ったうちの息子を叱ったのはサイパンか何かのホテル

でしたけれど、非常にそのコストを払わなければならないんですよ。社会常識に反したことをすると。特に海外ではそうです。結局子供だからといって、なあなあで育ててしまうと、これは尊敬されないんです。例えば移民としてどこかの国に行った場合に、その国のルールに従わなかったら生きていけないのと同じです。

上田　スイスに行ったときに、スイスの教育に触れる機会があったんですが、スイスではいくつになって高校や大学に行ってもいい。個人個人がきっちり自分の生活をしていくことをよしとしているから、誰でも大学に行くというのではなく、本当に行きたい人が行けばいいんです。研究したい人は大学に行って研究できる、でもそういうことに全然興味のない人にも大学とは別のコースがある。自分が選択できる分野のコースを選ぶ、そこがスイスのいいところだって思うんですけれど。

むこうは自己確立っていうのをすごく学校で要求します。その子がどうやって自分を確立していくのかってことを教育する。そのかわり自分の確立したことを守る術として、他人を侵害するようなこともしないっていうことがきちんと守られている。

小学校一年から落第がありますし、義務教育期間は約八年ですが、必ずそれ以上やりなさいということではない。個人個人がもっている個性、能力っていうのは違うから、それを画一的な教育はできないっていうことが常識として社会に定着している。

だからたとえ小学校一年で落第しても、「これでもう一年分からなかったことをきっちり理解してから二年生に進学できるね」と言って、決して焦らない。でも日本だったら、落第したと言ったら親は何が何でも上に上げてくださいと言って頼み込む。そういうケアをするシステムがないから。そこがスイスと日本の教育の違いだなという気がします。そういう意味では、人のことじゃなくて自分がどういう生き方をしたいのか、自分がやりたいことをはやく達成するにはどうやったらいいのか、どうやったら自分が確立できるのか、っていうところを小さいときから教えていますね。

村上　日本ではそれはまず大人がすればいいんじゃないでしょうか。いまだに大人がそうしてないですから。大人の社会が自立を前提とした価値観で生きていないですから。そうしたものを子供だけに教えたり、期待することはできないでしょう。

上田　ええ、教育を作る人たちにそれができていませんから。教育制度について話してしまうときりがないですし。

村上　もう教育制度には期待できないと思います。教育制度のことは悪口言ったり、批判したりしてもしょうがない。

上田　そうですね。ある時期から、親でもない学校でもない。まず自分がやるしかないなって思ってきました。だから私は学校を作ってしまった。それとみんなで良くなりましょ

うって思いがちですけど、それもやめた方がいいかもしれませんね。

村上　ええ、自分勝手にやるのが一番いいんじゃないですかね。自分とごく少数の人たちからっていう、変えられないことは仕方がないっていうことです。もちろんそうやっていく中でストレスは発生するでしょうけど。

上田　ええ、ただ村上龍さんはご自分のやりたいことをおやりになっていて、ストレスはあまりないんじゃないでしょうか。そんなことを子供達と話していたんですけれど。

村上　ええ、ストレスはないですよ。忙しいですが。

上田　自分が好きなことをやって楽になったらいいじゃない、ということに尽きるわけですね。モデルがいないなら困るけど、実際村上龍さんという方がいるからいいじゃないと子供達には言っているんです。

了

二児の母から上田先生への手紙　4

上田先生が学園の子供達の間で悩んでいることは本来親が悩むべきことを親に代わって……、いや、親という役割では悩むことに気づかない部分まで子供のために悩んでくれている気がします。先生のお話を読み進めていくうちに、親が自分を持つことの大切さはわかるけれど、不幸にも自分を持たないまま時間を過ごしてきてしまった親達に、「子供が不登校になったから、親は自分を持ちなさい」と言っても、きっと親はもうわからないし、仮にわかったとしても「自分を持つ」なんてこと、すぐにできるようにはならない、とも思います。もう子供に本当のことを言ったほうがいいのかもしれない、という気までしています。「親は間違って自分というものを持たないまま親になり、子であるあなた達を苦しめるかもしれないけれど、あなた達は、その間違った親に負けてはいけない」のだと。「その親に打ち勝って、自分を作り、自分を探し、今度は自分が自分を持った親になりなさい」と激励するしかないような、そんな気がしてきました。問題のない（起こらない）社会など、そんなものは存在しない。逆に、仮にそんなものがあるようにみえるとしたら、むしろそんなものは怪しくて健全な社会ではない、という事実は、バブル経済が崩壊して私達は随分とたくさんの勉強をしてきたと思います。学校だって、人間だって家庭だって何の問題もないなんて、偽善ぽくって、うそ臭い。結局のところ試されるのはその問題が起こったときの解決能力なのでしょう。不幸にも、今までの子供達はその問題の中に放り込まれたままなのかもしれません。問題を解決する糸口を見つけられなくて。でも、ここまできたら、子供達自身にも、その中で自分自身を強くしていってもらわなければいけないと思います。なにより自分自身のことなのですから。大人という社会が子供に、「こういう大人になってほしい」とか「こういう社会を作っていってほしい」「こういうことのできる大人になって欲しい」といった子供の将来像を求めて、その要求を具現化するための教育手段が学校という形をとるのだから、もちろん大人も社会も、自分達の将来社会を作るような気概で、子供を取り巻く環境作りに取り組まなければならないと思います。

そして、先生のお話を伺い、私自身いろいろと考え、自分の力で生きていける（助けて欲しい時には助けてと言える）、問題の中にあっても負けないで解決してゆける「強い子供に育てたい」と思いました。そうすれば、愚かな母親である私も、子どもと一緒に強くなっていけるかも。（虫がよすぎるかな？）

「子供に強くなってもらいたい、母親として今何をどうしたら？」と考え、「でも、私は愚かで、失敗もするし……。うーむ、安直かもしれないけれど、母親としては、私という人間は愚かだけれど、あなたという存在を大事に思っているということを伝えて、大事に思っているからこそ、こういう大人になって欲しいのと伝えていくしかない」。きっと私はこれからも毎日二人の娘を育てながら、『これでいいのかな？』と生活のさまざまな場面で自問し続け、そしてその自問の結果が本当に出るのは、何年も後になりますが、上田先生の言葉に、これからの子供との生活に、そして自分自身の生活に、たくさんの機知をいただいたと思います。たくさんの考える機会と有意義な言葉を下さりありがとうございました。